

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'86 秋

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内

〒151

振替 東京九一 一九一八九一

発行 一九八六年一〇月九日

気を引きしめて運動を！

梶谷典子

「まだ共修運動をやってるんですか？ 男女共修はもう決まったんでしょう？」という声を聞きます。

実際はそんなのきな状態ではありません。今のままでは実施はまずと先のことで、

「学校の実態」や「生徒の多様な能力、適性、実際の共修が行われないおそれもあるのです。」「新教育課程の実施までは、やらない方がいい」と、今までやってきた共修をやめる動きさえ出て来ている。

「学校の実態」や「生徒の多様な能力、適性、気を引きしめて運動をすすめましょう！」

男女共修をどうすすめるか

（文部省の狙いと私たちの願い）

教課審の中間まとめを受けて

集会のおしらせ

★と き 十月二十五日（土） 午後一時半～四時半
★ところ 婦選会館（電話〇三・三七〇・〇二三八）
★報告者 牧野カツコさん（横浜国立大学教育学部）

★参加費 会員四〇〇円
一般五〇〇円
（資料代を含む）

もくじ

集会のおしらせ	(1)
全国交流集会報告	(2)
母親大会報告	(10)
連絡会報告	(12)
世話人会報告	(13)
家教連夏季集会	(14)
We 夏季フォーラム	(14)
体育の中の男女平等について	(15)
マスコミから	(15)
おかしな総理府調査	(16)

中間まとめは

間もなく発表されます！

教育課程審議会の中間まとめは九月発表の予定でしたが、十月に延びて、二十日発表と言われています。家庭科については、第四委員会の結論を受けたものになる筈ですが、注意深く検討してこれからの運動のしかたを考えましょう。

※号外発行のあと、お祝いのおたよりを何通もいただきました。ありがとうございました。

共修へ向かって さあスタート 全国交流集会報告

七月二十七日、東京都婦人情報センターで開催したすすめる会全国交流集会「共修へ向かって さあスタート」は、開始時間十時にはほぼ満席、出足からいつもの集会とは違う熱気につつまれ、午前中は17道府県の報告がなされた。

△沖縄（文書で）菊川さち子さん

73年、共修をめざし家庭一般自主編成運動が始まる。81年に普通科で選択科目家庭経営が、商業高校で家庭一般の男女共修が実施され、同年11月の中央教研集会で家庭科の男女共修をすすめることを決議。現在、共修校は21校で614名の男子の家庭一般を履修している。今後の取り組みとしては各学校で他教科の教師や地域の理解や協力を得ながら共修に向けて研究を行う。

△大阪▽宮崎美代子さん

すすめる会関西グループでは、文部省の方向がでた今、各自治体段階で実施時期を早めることが問題と思っている。

あったらよいか、というテーマをあげるなど県教委も変えなくてはいけないと思っている。家庭科教師は、今女子だけを教えているが大変なのに、八年後男子にもは、とても、という思い。まずは力量をつけ、岐阜県の私たちの考えをまとめようとしている。

△長野▽佐藤美枝子さん、長谷川美子さん

（48改訂にむけてのとりくみを佐藤さんから報告。共修最初の授業の時は足ががくがくふるえていたというエピソードも。）

最初共修は5校で始まったが、現在は21校で、選択校は40数校、県下の半数以上の高校でなんらかの共修ができています。

長野県は家庭科教師独自で毎年対県教委交渉を持っている。今後、私たちの力をつけていくことが大切で、日頃の学習活動が重点になる。組織、世論をうまくしていかなければ大きなものにならない。

△静岡▽武田恭子さん

教課審の方向が出たのを聞いた時、教科内容においてせめぎあいの時期がくると思った。教科内容は73年から組合の家庭科の先生を中心に研究会を作っているが、県教委は我々の中身を排除しようとしている。官制研究会会誌の冒頭で指導主事が、県一

完全共修を西成高校で実施しているように現行の指導要領の中でも共修はできる。それはばむ教育委員会もあるが大阪府教委は、学校がよければ、どうぞという姿勢。共修をばばんでいるのは学校だが、関西グループでは、学校まかせで何もしようというしない府教委に対し、学校現場の女性差別の実態を把握しようとアンケート実施を要望している。

現場、運動体両方の取り組みが必要だ。

家庭科の男女共修をなぜすすめていかなければならないかで、男もやった方がよい、女性差別をなくした方がよいから、と意見が違ふこともあるが、両方の人たちがはり、はば広い意見を集約し運動をしていきたい。

△新潟▽小野塚サチコさん

組合では家庭科検討委員会を作り、今までに資料を五冊作った。その資料をもとに実践していこうとしているが、まだまだ実践するところが少ない。新設校で、教育委員会や校長の圧力でだめになったところもある。婦人部の対県教委交渉で、家庭科の共修を

司会 記録・まとめ
芦谷 薫 午前部 馬場洋子
石川由紀 午後部 堀谷典子

訴えている。七月に開かれた官制研の家庭科担当者会議では、歴史の流れを変えることができないことを悟ったようだ。

△岐阜▽津田直美さん

家庭クラブ、技術検定でも五指にはいる家庭科では先進県、と県教委が言っているような県。おとし、家庭科の問題が出た時、官制研の統合で、岐阜としては四単位必修を守らなければならないと、署名運動が出されたり、教課審の方向が出る一週間前の同じ総会で、二単位絶対女子必修の署名が出され、それでなければあなたの首がとびますよ、とも。

しかし、今年の官制の教育課程研究会で、時代の進展にもなった家庭科教育はどう

といっても私たちには関係ないという風潮があった。

共修実施状況は83年に1校始まり、現在普通校3校、養護、定時制各1校の計5校。

87年以降、数校がやる方向で検討している。他教科の人が家庭科共修をやったと職場で話しかけられるが、家庭科教師自身が一歩乗りきれない。

家庭科教師自身の問題もあると、被服室や調理室にこもらず職員室に出て声を出し、存在証明したりアピールしていくなど、日常生活でも前向きの行動をしている。

△愛知▽宮崎世津子さん

つい先日開かれた名古屋市家庭科教師十六名の研究会の教課審の方向への反応は、共修は当然三名、理論はそうだが実際に動くのは？が二名、反対十一名。学校の単位のぶんどり合戦で一对四十で困ってしまう、どうしようという弱音が本音。

上の人はコロッと変われるが、現場の先生はなかなか変わりきれないところがある。しかし、やらなければならない、どうしよう、やめようかしらとなってしまふ。

家庭科の先生たちも男女共修でやる自信とやりたいという気持を、勉強しながらつけていく必要がある。他教科の人にも働きかけて

いく。手あたりしだいやっていくしかない。

△千葉▽旗沢セイ子さん

24日、教育課程の説明会の時、指導主事は男女共学については、今論することはできない、と。昨年の官制研究会で女子のみ四単位必修の署名と請願書を出している。指導主事自身もとまどいを感じてゐるのでは。

教組を中心に検討委員会を作っている。私立学校で十三年前から共学をやっているところもあることから、不安だったら見にくくれば良いと宣伝している。千葉は全国の盛り上がりで変わっていくという感じ。

△京都▽竹森培子さん

12年前から共修を実施。家庭科の中身をどうしていくかで始まったが、昨年ようやく、四単位で何を教えるかという到達目標ができた。教えた生徒がたくさん家庭科教師として赴任してきているのも恵まれている。共修を始めたころは、男子に教える時、何で足がふるえるんだろという思いだったが、今はあたり前という感じ。家庭科が存在するだけで子供たちが変わっていくのがはつきりわかる。京都は昨年、教育制度が変わって、様々な学校ができてゐる。新設校は女子のみ必修と

なってきた。今後四単位に向けてどんな取り組みをしていかなければならないか。今京都は静かな状況という感じだ。

△鳥取▽本橋靖子さん

男女共修という六月はじめの新聞報道までは女子必修の一本だったが、7月9日発表直前の官制研究会では、男女共修の学習内容を研究する方向にいくということになった。しかし、その時発表されたのは、既製のソフトを組み合わせた情報処理の学習内容をいれたカリキュラム。

高校の共修校はゼロ。中学は乗り入れて食物が各校、被服二校、住居一校。

先生方の意識が問題で、男と女と分けて自立するように勉強していけばいい、と共修の必要を感じていない。地域が性別役割分担意識があるからとも。流れが変わったからではなく、なぜ共学かという原点にもどらなければと勉強する必要がある。そして、教師の連帯が必要だ。

△島根▽大利良枝さん

昨年から当番になつて校長部会の校長が熱心で、男女共修を検討する会を作った。資料を買い集めてどんな内容にするかを公的機

はないのか、これに対して家庭科教師はどう考えていくか、と。

△山形▽佐藤慶子さん、齊藤順子さん

(高校長家庭部会の集いに講師として呼ばれたという共修をすすめる会の佐藤さん。)

現在男女共学実施校はゼロ、男子に教えるはじめて三年で、他に1校ある。

昨年の全国教研に刺激を受けて、何とかしなければと、地元の人に働きかけて、サークルを作り、教課研、組合に働きかけている。官制研究会への働きかけも、山形五地区にわかれて、NHKの「おはようジャーナル」を見ながら考える取り組みをした。県教委のおひざもとだけはなされなかったりと、まだまだという感じ。

六月の家庭科の県大会では、出席した校長や指導主事も、共学に変わっていかなければならぬという話があった。

△北海道▽吉沢澄子さん

63年に高教組で男女共修の試案を作っている。20数年の歴史がある。今第三次試案を作ろうとしている。教課研の「方向」についても、朝日新聞の連載「いまこそ家庭科」を読んで、なんとなく自分の身近に感

じていないというのが実態。

かつて共学をつぶした校長が今は共学実践校に行つて共学をすばらしいと言っている。職場の雰囲気がちっとしていると共学が続いていく。しかし、共学をつぶす方向もまだある。今年、校長部会の方から共学を推進する方向を出している。これからの共学をどうすすめるかが問題。他の県がやってからという感じだ。

共学が否かではなく、学園祭でうどん作りとか、もつとやれるところからやっていくことが大事。内容も他教科の先生との連携であり欲ばらず、ここだけはやろうということ考えなければ。

△神奈川▽中沢美智代さん

川崎の中学の現状は相互乗り入れが多く、共学でやっているのは中学一年30%、二、三年はほとんど数えるほどしかない。官制研は組織的にやられてさかんだけれど、共学のことがほとんど話題にならない。

共学を進める上で障害になるのが中学二年に行われるアテスト。全県下一斉に教科書にそった内容で、進路の資料にもなる。自主編成していてもアテストの平均点を気にせざるを得ない重圧がある。

関で研究をすすめている。家事裁縫という意識の多い家庭科教師の中で、やっと研究を始め、伝達機関になっている。

今年のうちに男女共修への道をすすめなければと思っている。共修実施校は高校で二校。指導主事を無視した形になっているが、なかなか道はけわしい。

△熊本▽(文書で)立山ちづ子さん

二十年前から女子のみ必修はいけなないのでと話し合われ、始めは組合で、すぐに官制研でも話し合われてきた。県下10地区に分かれ、地区ごとの研究テーマにそつて実際の活動をすすめている。

現在、家庭一般共修校は県立63校中17校、家庭に関する科目を選択しているのは15校。

6月中旬から7月に行われた県高教組の検討委員会地区からいろいろ意見が出された。家庭科の男女共学をどのようなねらいですすめていくのか、男女平等を最終目標にするのか、男女とも人間として必要というのか。何を目標にしていくのか。外からみると技術の取得を目標とみられるが、それでいいのか。教課研の「方向」で高校は三科目が並んでいるが、三科目の中からの選択必修でいいのか、これだけはぜひ学ばせたいというもの

△鹿児島▽山下百合子さん

共修への意識を持っている人間はいるのだが、現場の組織ができていないのでなかなか前進しない。自主編成といっても遠い向こうの話になっている。わかることはわかるが地域が求めないし、鹿児島県では男女分業が地域に生きていて、教師自身も意識が広がっていない。授業実践を通して広めていくなかで、どう共修をすすめていくかと思つてゐる。

二年前から高校二単位だけの共修が2校で始まっているが、県教委は別学共修でなければ許可しないと言っている。

最後に朝日新聞で「いまこそ家庭科」を連載した上丸洋一さんが、連載を始める時はあまり感じていなかったが、やり終えたら、やっぱり、今こそ家庭科だ、と思う。文部省の記者発表の時、女子が家庭一般、男子が生活一般というやり方にならないかと質問すると、「それは差別です」とはっきり言った。それが差別なら今も差別だが、これを武器におおいに共修を進めてもらいたい。又、生活一般二単位の中の体育について質問すると、「家庭科と体育はくされ縁ですから」と言ったという。

——ここで休憩——

共学実施状況の調査結果から

午後の部の最初は、家庭科共学の実施状況の調査結果の報告です。

今年七月、家教連では各県の会員にアンケートを出し、中学、高校それぞれ20都道府県から回答を得ました。

中学 技術・家庭

報告 武市 成子

共学を行っている学校は43%、ただし全面共学は0.9%と少数。一学年だけで行っているのが過半数ですが、2学年にわたる共学がふ

えて来ています。

学習領域は食物が群を抜いて多く、次が木材加工ですが、これまで「男子に適した教材がない」といわれていた被服がふえ、三年では食物を越えています。

共学推進のために「施設、設備、学級定員」などについての要望が強く、技術科と意志統一ができない悩みを持つ人が約4割ですが、一時期より理解はすすんでいます。

現在の枠の中で苦労して辻妻を合わせながら実践がすすめられており、教育課程改訂についての要望は約4割。

もっと視野を広げ、問題を整理する必要があると考えられます。

高校 家庭一般

報告 斎藤 弘子

「家庭一般」共学実施校の数は表の通り。選択科目での男子の受け入れはふえ、現場での共学への抵抗感は薄れていると言えそうです。

各教委は「検討会議」の報告については殆んどコメントせず、たまに「さわぐな」勉強しなさい」などと言っています。

官制研でも共学問題を取り上げざるを得なくなっていますが、「共学必修」を考えるより「男子向き」の研究になる傾向があります。官制研に私たちももっと入って行くべきです。

「家庭一般」男女共学実施校数

県名	全日制 普通高校	全日制 職業高校	定高 制校
北海道	1/14	1/14	2/14
宮城	2/57	1/15	2/12
福島	2/56	0/54	0/7
新潟	0/84	1/18	0/25
茨城	0/91	0/25	0/18
東京	1/146	9/64	30/112
千葉			
静岡	0/102	0/25	0/5
長野	10/64	5/25	7/25
愛知	0/110	0/30	?
滋賀	1/30	1/14	1/4
奈良	0	0	1
広島	3/103	0/17	1/23
鳥取	0/18	0/15	0/2
高知	0	0	0
香川	0	1	1
福岡	0	0	2~3
大分	0/56	1/1	1/7
宮崎	0	0	0
沖縄	8/34	11/47	1/12

経過報告

半田世話人は、一九八四年一月からの、会の活動と、他団体、マスコミの動きをふりかえり、次のようにしめくりました。

「とにかくここまで来てよかった。いろいろな立場の大勢の人と手を組んで来たことがよかった。特に先進県の方々の努力に感謝したい。これから問題点を鋭くみつめて対応して行こう。」

教課審の考え方解説

和田世話人は中学「技術・家庭」の変りようが大きいこと、高校の各科目が4単位程度となっているのは微妙であることに注目するよう求め、「代替措置」と「コンピュータ導入」が特に問題であることを強調、「本当の家庭科教育」を要求して行こうとしめくりました。

これからの運動の重点

（提案・梶谷典子）

《目標》

I 新しい教育課程をできるだけよいものにするために――

1. 各科目、各領域（特に新設の）の内容をよくする。

2. 「代替措置」ができるだけ行われないようにする。

II 新しい教育課程がよいかたちで実施されるように――

1. 現場教員の積極的なとりくみがすすむようにする。

2. 共修に積極的な教員（男性も）をふやす。

3. 共修をすすめやすい状態をつくる。

4. 男女別の指導が行われないようにする。

5. よい教科書ができるようにする。

III 現行の教育課程の中でも共修をすすめるために――

1. 「現行の履修形態はできるだけ早く改めるべきだ」という認識をひろめる。

2. 現場教員の積極的なとりくみがすすむようにする。

3. 共修をすすめやすい状態をつくる。

《具体的な行動》

A 「共修がきまった」ことを宣伝し、ムードを盛り上げる。

I 情報を積極的に集める。

教課審をはじめ、各団体、各地域の動きをつかむ。特に共修に逆行する動きに注意する。

ウ あるべき内容を考え、提言する。

エ 内容についての研究や情報交換を促進する。そのため、他団体にもひろくよびかける。

オ 教員養成について、文部省や大学等に働きかける。

カ 教員数、教員の研修について、文部省、各教委等に要望する。

キ 施設、設備等の条件整備について、文部省、各教委等に要望する。

ク 代替措置ができるだけ行われないように、また男女別の指導が行われないように、文部省、各教委、校長会等に働きかける。

ケ よい教科書ができるように、教科書検定基準に注意し、文部省、教科書会社、執筆者等に働きかける。

コ 本、パンフレット、リーフレット等を新たに発行するとともに、既製の本やパンフレットを活用する。（特にア、エのために）

サ マスコミに積極的に働きかける。（特にア、イ、エのために）

シ 各地域で集会を開く。（特にア、イ、エのために）

★三時十分から三時半まではティータイム。障害者のお店のクッキーと、紅茶、煎茶、ウーロン茶のサービス。会場のあちこちに話し合いの小さな輪ができました。

三時半からは討論。そのあと、教課審福井会長あての要望書（次ページ）が半田世話人から提案され、集会参加者一同の名で提出することがまりました。

討論から

△男女差別、男女の役割について▽

◆差別は絶対にいけないのだということ強く言っている。

◆教員室でも「男」だから、「女」だからという考えがあたり前。女性を人間としてみる教育をすすめるければ。

◆家事を分担する父親はふえ、父母の家庭科への理解は深まっている。

△運動のすすめ方について▽

◆各学校でねばり強く――

◆遠い京都や長野の話聞いて感心するだけでなく、自分の学校ではどんな取り組みをしているか、何が壁かについて情報を交換したい。

◆同じ学校の家庭科の先生に共修をやるよ

要望書

私たち「家庭科の男女共修をすすめる会全国交流集会」参加者一同は、貴会が教育課程改訂の方向として、中学校技術・家庭、高等学校家庭科の男女共修を決定されたことを歓迎いたします。

戦後、民主的な家庭建設のための教科として、男女共に学ぶ家庭科が誕生しながら、女子用教科に塗り変えられてきたその悲劇的な歴史をふり返る時、感慨深いものがあります。今回の成果は、女子差別撤廃条約批准という好機を得たとはいえ、男女平等を、人間らしい生活を、子どもの目を輝かせる教育を切望する人々の、運動の広がりによるものだからです。

すでに、男女共修の技術・家庭、家庭一般の実践者が全国に輩出しています。このたびの決定は、力量を持ちながら、制度の壁に妨げられ、実現できずにきた人々を含めて、男女で学ぶ新しい家庭科を志す教師に、大きな励ましを与えました。男女差別を温存し、再生産する教育が改められることを祝福したいと思います。

しかし、幾つかの問題点も見出されますので、今後の答申には、ぜひ次の点を盛り込んで下さいよう、ここに要望いたします。

一、中学校技術・家庭は、性格や目標を異に

うにすすめて来た。あきらめかけたこともあったが、今また働きかけている。

◆家庭科担当は一人だけなので、まず十六人の女教師一人一人と話し合い、次に体育の先生に話して賛成を得てから教文部長にうったえた。京都の試案を少し書き直して出したら「これなら」ということになり、職員会議で圧倒的な支持を得た。

◆機会を捉えて宣伝を

◆PTAで男女交際が話題になると、それに関連して家庭科でやったことをプリントして配った。

◆あちこちで共修を言い続けて来たが、自治体のサークルの中でも主張を続けている。

◆論文募集などの機会を捉えて宣伝しよう。

◆中広い連帯を

◆国際婦人年に関係して運動をやっているところ、婦人団体、地域の団体といっしょに運動しよう。

◆他教科の男の先生の発言は効果的。他教科、外部からの批判がほしい。

△教課審の決定について▽

◆なぜ高校では三科目の選択でなければならぬのか。技術重視になり過ぎないか。コンピューター優先で、他の施設・設備

する二つの教科を便宜的に合体させたものです。本会では技術と家庭に分離し、双方を男女共修にするよう要望を重ねてきました。しかるに、技術・家庭の持つ矛盾が改善されないばかりでなく、高等学校の家庭科にそれを広げる形になっていることは納得できません。

二、高等学校に新設した「生活技術」「生活一般」のうち、「生活一般」を選択した場合、二単位を「技術一般」「情報処理」さらに「体育」で代替できるという措置は、理解できません。新教育課程の実施は、七、八年先で、この間に現実的な対応は可能です。代替措置の記述を削除するか、止むをえない場合は、代替措置を認める条件を明確にし、期間を限定するよう、要望します。

三、中学校の「家庭生活」、高等学校の「生活技術」「生活一般」については、家庭や生活の本質的な問題をとらえ、生活の主権者を育てる内容にして下さい。固定的な家庭像を押しつけ、もの作りに終始し、産業界の要請を優先するような家庭科からは、脱皮しなければなりません。

四、男女で学ぶ新しい家庭科が、望ましい姿で実現できるよう、国・地方自治体の教育行政機関に対して、教員の研修や定員確保、施設・設備の充実など、条件整備に取り組むよう要望して下さい。また、すでに条件

は整わないのではないか。

◆「代替措置」は絶対に行われないようにしよう。

（世話人から）

◆内容について、これだけが必要、これは要らない、ということを書き出して出して行こう。

◆決定は理想からは遠いが、白紙撤回はないということ踏まえて、最もよい結果が得られるように運動しよう。

◆ダダをこねるような要望でなく、とるものとするための運動をしよう。

◆これまでの女子差別撤廃条約批准をめざす運動はわかりやすいものだったが、これからはもっと慎重に考えながらやらなければならぬ。

△家庭科と職業教育の関係について▽

◆農業高校で、職業教育としての家庭科に行きづまりを感じている。家庭科が文部省職業教育課の担当ということは何とかならないのか。

（世話人から）

◆私たちは一般教育としての家庭科をめざしている。

◆女教審では、職業教育課が担当しないように提言している。

を整えている学校では、七、八年先を待たず、できるだけ早く実施に踏み切るよう、奨励して下さいを望みます。

懇親会では

中嶋 里美

全国交流集会のあと神楽坂上の鮎忠で懇親会が開かれた。参加者は二十数名であったが冷たいビールで喉をうるおしながら、自己紹介、近況報告等で交流を深めた。

新潟から参加して下さった大原八重子さんの高校生の娘さんは「学校では女の子は女の子らしくという教育をされとても反発を感じずる。夏休みの読書感想文には昼の会場で買った「女たちは地球人」を書くつもり」と語り、大阪の宮崎さんは学校ぐるみで共修と取組んでいる学校とそうでない学校では大変な違いがあると述べた。また名古屋からの宮崎さんも東京での共修運動がとても参考になっていると、自分達も名古屋で共修や雇用均等法のことではずい分とロビー活動もしたとの報告があり、世話人の和田さんからは「家庭科は最高の恋人、心中してもしがらみがある」との発言があり、それに対して持田さんの「私はそれ程でもないけど」に一同爆笑。山形の佐藤慶子さんに司会をしていただいた。

第32回 日本母親大会報告

七月二十六・二十七日 埼玉県で

人間の尊厳と男女平等分科会

(二十六日)

家庭科の男女共修をすすめる会

担当の分科会

八島 紀子

家庭科の男女共修をすすめる会は、母親大会の実行委員会に始めて参加(実行委員は榎本世話人)、「人間の尊厳と男女平等分科会」の一つを担当(同じテーマのもう一つの分科会を家教連が担当)しました。

実行委員会に参加して

榎本 穂子

△経過▽

- 3・19 32団体(新加入団体3)の参加を得て、第1回実行委員会発足
大会期日・会場・大会構想・大会役員選出等について
- 4・16 全体会のもち方・大会予算六千六百万円等について、安全保障会議設置法案反対決議
- 5・22 全体会・分科会・特別分科会、会場への交通・手当・日当・福袋等について、決議・宣言・申し合わせの取扱いについて
- 7・10 '85年度決算・監査報告、大会全体の準備状況について確認

7・25 全体の確認と助言講師・司会者打合せを兼ねて開く
5回の実行委員会は、定時刻に全国の代表者が続々と集まり、熱心に討議が進められ、最後に各県からの情報・活動状況等が熱っぽく交流されました。こうして当日の大会へ全体の力が結集されていきました。

△意義▽

「生命を生み出す母親は、生命を育て、生命を守ることをのぞみます」のスローガンをかけて開かれる婦人の統一の広場です。大会は、全国の母親達が、要求と活動をもちやり、学びあい、集約する場、アピールする場、要求を阻む者への大デモンストレーションです。延べ二万数千人の人達が集まった事に一番の意義を感じます。母親運動を通して物品を売った僅かの利益を積み立てて旅費をつくってきましてという人がいました。地元埼玉の縁の下の仕事者黙々と進めていった方々、からだもおおらかな印象の実行委員長、てきぱきと会をすすめて和やかな事務局長、熱心な各県代表、皆、すんで大会成功にとりくんでいる過程が次に意義あることです。

日本母親大会は、七月二十六日から、埼玉大学を含め、4つの会場で開催されました。性教育と家庭科の男女共修の問題を含むこの分科会は、埼玉のG教室で、60余名の人たちが全国から集まり、暑い中、熱心な話し合いが展開しました。

午前中は、全国各地から、今の子どもたちの状況について、親、教師、男、女と様々の人たちが発言しました。

高校生の男女交際や日常生活の中に女の仕事、男の仕事と分かれていて、女の子が勉強しなくなった。又、これに関連して、女性がしっかりとがんばるタイプと、どうせ女ですものとして降りてしまうタイプに二極分解していて、学校で女生徒に未来をどう語っていくかが問題ではないのか。等、日頃から悩んでいることや直していかなければならない事などいろいろ意見が出ました。

午後は、家庭の中の親子、夫婦の問題。性教育や家庭科の共修、男女平等教育をどのよ

うにすすめていけばよいのかを柱に討論しました。高校の社会科の先生は、「自分の性をどう考えるかについて、女性の生き方や、男女の平等とかかわってくる問題なので、今の生徒たちは、男についていけばいいと考えがちで、非常にギャップを感じてしまう」と発言し、又「障害者の性についても生き方の展望がないと語れない」と障害者の作業所勤務の男性が話し、「家庭科を男の子にも当然学ばせたいが、中身をもっと工夫しては」と様々の角度から発言があり、助言者の村瀬幸浩さん、半田たつ子さんから、言葉や理念で説得するより、その人がどう行動するかが大切である。男女平等や家庭科共修をどのようにすすめていけばよいかは、男性ももっと生活にかかわっていくことが必要であり、学校の中での、平等教育を進めることも重要である。例えば、名簿の問題等、日常の小さなことから変えることが大事で、もっとみんなな

目を光らせるべきだとお話がありました。最後に、家庭科の男女共修で教える内容をもっと研究しようという申し合わせ事項を確認し、会を終りました。

家庭科教育研究者連盟

担当の分科会

武市 成子

和田先生から差別撤廃と男女平等に関して「差別撤廃条約」の批准は地球規模のハイライトであり、家庭科、技術職業教育の差別問題に解決の目度がついたこと。男女平等教育上の教育課題4点が提起され討議に入った。子どもたちや家庭の状況は、仲間づくりがへたで便所にくっついて行くだけの仲間になつていたり、男の子がたいへん子どもっぽくなり、女の子が罵声をあげやる気をなくしている。炭鉱住宅の狭い中で異性が遊びに来ると親が遠慮して外出する、夫がいても母子家庭にならざるをえないなどの問題状況が出されたが一方、母親のきびしい労働条件の中で子どもや夫が家事に参加する新しい姿も語られた。

「人間の尊厳と男女平等」にかかわって話しあわれ、家庭科の共修については、性教育とかかわって多く実践が紹介された。小学校からは生命の大切さをスライドを使っておしえた実践、中学では共学家庭科で男女が相互の相違点を確認しあうなかで理解して行く実践、高校では低学力、生活上問題をかかえている生徒が生活や生命を家庭科を通してみつめ力をつけていく実践などが出され共学の必要性・必然性がよくわかる討議となった。

今後の運動を広めるために、教師・母親の

意識を変え民主的教育とよい家庭をつくる世論づくりの必要が語られ、教師と家庭が責任をおしつけあわず手をたずさえて行くこと、悩める20代に運動を浸透させることなどが話しあわれた。

全体会のようす(二十七日)

小川 昭子

・生命を生み出す母親は、生命を育て、生命を守ることをのぞみます。の願いを持ちよって、全国から集まったお母さん達で埋めつくされた県立上尾体育館。

会場には、家族連れの男性や子ども達の顔もあって、皆身動きもできない中で、熱気に包まれた全体会でした。

住井さんさんの記念講演は、反核反戦は宇宙の法則、と力強いお話で、感動の拍手がしばしなりやみませんでした。

県内のお母さんや子ども達で練習を積み、この日迎えた、いのちのうたの合唱は、母親のやさしさとくましさを美しく歌いあげ、各地の運動の構成劇と共に、愛と勇気で歩みつづけた母親運動の前進の決意がこめられたものでした。

国際婦人年日本大会の 決議を実現するための 連絡会報告

和田 典子

教育課程審議会への申し入れ

「家庭科についての基本方針」の報道をうけて「連絡会」としての申し入れ案文を検討することになり、7・14の全体会では「教課審」に対する申し入れを中心に検討し、九月の中間まとめにむけて、文書を全委員に送付しました。

△申し入れのあらまし▽

- 一、審議にあたっては「女子差別撤廃条約」の精神にのっとり「日本大会の決議」を尊重した改訂をされたい。特に、男女平等をすすめるための決議事項（左記（一）～（三））に留意。
 - （一）男女共学の推進、教育機会の拡大・平等を保障する条件づくり、家庭科及び技術・職業・労働教育の小・中・高での共学・必修
 - （二）男女平等をすすめる教育内容の改革
 - （三）女性の社会参加をすすめるための教育
- 一、右の決議・要望にのりて左の点については再検討が必要である。

そのほかの活動

平和に関するNGO地域会議の報告

6月25日、27日、ウィーン国際会議場でひらかれた右記の会議（二〇〇人規模）に、出席したYWCA前会長の関屋綾子氏から報告をききました（7・14 全体会）

自由に意見交換を行ないましたが、チエルノバイリ事故に関心が集中したそうです。参加した日本人は民間から3名、関屋さんは、参加者に栗原さんの「生ましめんな」の詩と「連絡会」の平和宣言を配布し、被爆国の立場から発言しました。

配偶者特別控除についてのヒアリング

9・8の全体会では、税制調査会の中間報告のうち、標記について全国婦人税理士会の遠藤みち子氏からききました。

分野別小委員会の動き

◆教育分野の小委員会では、臨教審第二次答申に対する申し入れ文案を検討中です。

◆労働分野では「労働時間」についての労基研報告の検討をすすめています。

◆福祉分野では、税制と、売買取春もんだいを中心に討議を深めることになりました。

▼高校における家庭科履修の取扱いは、男女をとわず、総ての高校において必修とし「当分の間」といっても例外措置を容認しないこと。

▼中学校における技術・家庭科に、個人による選択をもちこまないこと。

▼高校の職業・技術教育は、家庭科とは切りはなして設け、男女を問わず必修とする。

▼中学・高校家庭科の内容は、実技に偏らず、基本的な権利を保障し、民主的な家庭建設をすすめる主体者を育てるものであること。

（加盟五〇団体名 列記）

以上

△奥田氏と面会▽

9月8日、大羽、中村紀世話人のほか紀平（有権者同盟）竹内（退職女教師連合会）吉岡（主婦同盟）和田（家庭科の男女共修をすすめる会）の計6名が、審議会の総会がもたれている農林年金会館に出かけました。

委員全員および関係官あての「要請書」を持参し、家庭科のまとめ役奥田真丈氏と面会一時間にわたる話し合いができました（すすめる会との面会はずっと拒否されていましたが）。要望事項に対する奥田氏の態度をまとめていえば「『連絡会』の要望は妥当でない」というのが本音？と受けとれる内容でした。たとえば「生活一般の選択で代替をみとめたのは、現場の共修反対に対応したため」で

世話人会報告

△七月十六日▽

●七月九日に出た、教課審の家庭科男女共修の方向の内容を会員に早く知らせるため号外を発行。その発送作業をしました。

（なんと発表一週間後という早業！）

●教課審委員長への要望書案を検討、さらに「お札」の手紙を初期の賛同者や集会講師、教組、文部省、外務省関係者などに送り、男女共修を盛りあげることにしました。

（馬場 洋子）

△八月二日▽

集った世話人たちはいつもよりもっと元気印でした。だって、日本母親大会には初めて家庭科共修の分科会をもてたし、7・27全国交流集会には、久々に大勢が集って交流できたんですから。従って今回のメインテーマは二つの集会の反省、ソーカッです。

まず母親大会。今年は埼玉の世話人が実行委員会に入って、分科会をもてたこと、今後世話人の余裕と開催地にとらみながら実行委段階からの参加を考えようということになりました。しかし教師以外の参加者が少な

あり「家庭科と技術科は切り難すべきでなく技術家庭科という一本の教科である」「実技に偏らずというが、実技は実践的活動こそ技術家庭科の独自性である」など、です。

しかし、中学校の選択は「個人の選択が本旨だが、現実には学校選択になる」とのこととその点だけはハッキリしました。

こうしたやりとりを通して、男女共学家庭科がうち出された背景には「情報化教育」と「親になるための道徳教育」をもちこもうとする産業界の要求と、高校多様化の意図が根づよくあることがよくわかりました。

臨教審に対する申し入れ検討

7・14の全体会ほか常任委員会でも検討を重ねてきましたが、共通理解をさらに深めるため8・29には、教育分野別委員会をひらきました。関係団体は「家庭科の男女共修をすすめる会、退職女教師連合会、日本女子社会教育会、新日本婦人の会、日本YWCA、草の実会、大学婦人協会」などを中心に8・29午後、研究協議会をひらきました。

出席が少く五団体での話し合いでしたがボランティア政策や道徳教育に対する意見に、いちがいがあったりして、時間をかけた話し合いの必要があり、続行する予定です。

った点、会の刊行物の売れ行きがいまひとつだった点、男性が参加しにくい名称も問題だと今後の課題も出されました。

全国交流会は、北から南まで多くの人が参加され、熱心に交流し今後の運動の確認が出来たこと、ティータイムが遠来の方へのねぎらいとはげまし合いの場となったこと、しかし時間不足で各地の様子をもっとくわしく聞いたり、地域での運動のとり組み方などの意見が充分に出し尽せないで、問題が絞り切れなかったのが残念などの意見が出ました。またここでも中学の教師の参加が少ない点が課題となりました。が、集会のもようが、読売、朝日、毎日と直後に記事になり、今後の運動の盛りあげには嬉しいことです。

そして、次の集会についての話し合いに入り、9月と10月の世話人会で継続して検討することになりました。

（芦谷 薫）

△九月十日▽

連絡会の報告、教課審やマスコミについての情報交換のあと、「家族・家庭に関する世論調査」についての疑問を話し合い、総理府に行つて真意をきくことにしました。続いて10・25集会のタイトル、だんどり、担当等を決め、特に、コンピュータ導入についてどう考えるべきか話し合いました。（梶谷典子）

家教連夏季集会報告

齊藤 弘子

今年の家庭科教育研究者連盟夏季研究集会は、21回目を迎え、7月29～31日、沖縄にて開催されました。

参加者は、380余名、例年の常識をはずれ、現地参加者が、全参加者の半数以上を占め、沖縄の先生方のファイトを本当に感じさせられた大会となりました。

沖縄国際大会の安仁屋先生による記念講演「命どう宝——沖縄の民衆の平和の心」を始め、基礎講座での沖縄の歴史、食、住文化、ミニ講座では、なまなましい沖縄戦体験記、実演も行われた沖縄の染と織、おやつ、歌と踊り、さらに今年の3月1日の県立高校卒業式での日の丸、君が代押しつけに對してのたたかいの報告など、どれもすべてが参加者に大きな感銘を与えてくれました。

沖縄での生活文化継承のとりくみ、平和といのち、くらしを守るための沖縄住民のたたかいから、私たちは大会テーマ「地域に根ざし、いのちとくらしを守る家庭科教育」に肉薄することができました。

もうひとつの大会テーマ（サブテーマ）の

行動する女たちの会のアンケート

体育の中の男女平等について

長谷川美子

共修を語る時、どうにも避けて通れないのが「体育」の壁。男女差は時間数だけでなく、種目、教員の男女比……etc. 行動する女たちの会・教育分科会では、この問題へのアプローチの一つとして、六月に都立高の女子体育教員一〇〇名に、「体育の中の男女平等について」というアンケートを実施した。

前回の「出席簿に関するアンケート」に比べると、回答率はぐっと落ちて四割足らず。生徒の男女比に関係なく、体育の女子教員は六名中一名という割合がトップ。多いところでも七名中二名どまり。にもかかわらず、現状を不適切だとして女子の増員を望む声は少数派。差別という点に目を向けないでいる限りにおいては、男の中に女ひとりという立場がある意味で居心地のよい落とし穴になっているという印象を拭えない。「このアンパランスの根拠は？」という問には、「男は女子生徒を教えられが、女は男子を教えられない」という答が一番多く、中には「女が複数いると女同志うまいかない」などというの

「今こそ家庭科の男女共学必修を」では家教連が創立以来一貫して主張し、実践してきた男女共学必修の家庭科教育が、今まさに実現しようとしていることを、私たちのとりくみの成果として確認し、確信を深めました。

同時にすでに各地にあらわれている、情報処理の持ちこみ、家政科を調理科などに細分化しようとする動きに對しては、その背景を見極め、私たちはあくまでも男女平等にねざし、子ども、青年の発達に役立つ家庭科教育をめざしていくことが話しあわれました。すでにだされている家教連の「小・中・高一貫構想試案」の検証も各地ですすめられていることもわかりました。

大会終了後に行われた「女子挺身隊の跡を訪ねる」など戦跡、基地めぐり、伝統工芸を訪ねての旅なども、沖縄ならではのものとなりました。

We 夏季フォーラム 報告

半田たつ子

富士山がでっかく見える富士吉田での二泊三日。テーマは「自分らしさをこそ、パートⅢ―他者との豊かなかわりをひらく―」。

Weフォーラムは、多様な人々が集い、本音で

も。大多数の学校で体育実技は男女別授業で、女子教員は保健の講義以外は男子を教えないのが実状だが、少数ながら男子を教えてみたいという人の存在は心強い。種目については、ダンスを取り入れている学校のすべてが女子に對してのみ、剣道、柔道、サッカーは男子のみと、これまた予想通りの固定化。ただ、「女子差別撤廃条約が男女同一の教育課程を規定していることを知っているか」という問には、「知っている」が多数を占めた。

共修の完全実施の逃げ道を残さないためにはもちろん、男女平等教育の問題としても、女性の雇用問題としても、行動を起こさなければという思いを新たにしたい。(十一月に集会を持ち、体育の問題をさらにクローズアップする予定)

※「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」は「行動する女たちの会」と改称して活動を続けています。

マスコミから

半田たつ子

全国の学校で「家庭科」を取材した。家事や育児は女だけのものだろうか、と教師たちは問いかけていた。家族の崩壊、食生活の混乱、いじめ……。そんな時代に、生活のあり方を見つめさせる試みが各地にあった。「家庭

語り合える魅力が看板です。初回から子どもの参加をめぐって話し合いを重ねてきて、今年には子ども活動のプログラムも用意しました。そのため、大人百余名、子ども四〇名、にぎにぎしい合宿となりました。

しかし、何といっても今年は特別の年。家庭科はどう変わるのか、いやどう変わるのかと、明日の家庭科を担う若々しい人たちが参加。すでに十三年前、京都で家庭科の男女共修を実現させた森幸枝さんも見えたことから、せいっぱい吸収して、自分のエネルギーを発火させようという意気込みにあふれていた。一日目夜の交流会、二日目午後の分科会、そして夜の、この指とまれ式交流会。まるで、ずっと家庭科にはりついてた私は森さんや私の世代と20代の人たちとをつなぐパイプを大事にしなればと痛感しました。

しかし、30代・40代の人たちがどれだけ自分の位置を自覚しているのか、いささかの疑問も持ちました。Weに集う人々とはいえ、家庭科に関係ないと思っている人(実は深い関係があるのに)が、家庭科に今ふりかかっている課題をどう認識しているのか。そこにパイプをつなぐ難しさもずしりとこれえまして。最後の全体会で、フォーラム参加者一同として、教課審に要望書を出すことを決め、はっとしました。

科といえは料理・裁縫」という昔ながらの殻は今、打ち破られようとしている。男と女がともに自立し、助け合える社会を目指して。朝日新聞、86年四月一日付、「いまこそ家庭科―教室からの報告」初回の前書きである。この名文で始まった連載は、四月に20回。六月十五日からは「課題と展望」と題して19回。最終回はタイピングよく、教課審が男女共修の基本的方向を出した直後、「新時代」のタイトルで結んだ。

さらに、一番ヶ瀬康子・村田泰彦両氏と私で、座談会を二回、読者からの投書で締めくくるといふ至れり尽くせりぶりであった。この記事が家庭科関係者外にも注目されたことは、同紙七月十三日付「私の紙面批評」で平木典子氏が絶賛されていたことでも明らかだ。二月、朝日新聞学芸部に呼ばれて、いくらかの意見を述べ、すぐれた実践者を紹介した私にとって、この連載の成功はうれしい。同社の識見と記者諸氏の努力に感謝したい。

七月九日の教課審の決定は、NHKNC9も取り上げた。昨秋同番組で、キャスターが「針を持ち鍋を持つ男子高校生、この表情を皆様はどう感じになったでしょうか」と述べたことに昔日の感を抱く、好意的な取材であった。

おかしな総理府調査

総理府内閣総理大臣
官房広報室を訪ねて

八島 紀子

九月一日付の新聞に発表された「家族・家庭に関する世論調査」を見て、驚かれた方も多いと思いますが、世話人会で、いくつかの疑問が出てきましたので、九月三〇日、世話人の中嶋さん、榎本さん、八島で、広報室を訪ねました。

応接室で、参事官の坂東真理子さん、伊藤隆介さんと「会」の三人で話し合いました。

まず、「会」の中嶋さんから、どういう意図でこの調査を行ったのか、との質問に対しては、参事官から、四月から雇用均等法が施行され、職場で女性が働き、家に帰っても家

事をしており、このような現状に対して、警鐘を鳴らす意味で、個々の具体的な現実を知ってほしいと思い、調査したとの説明がありました。結果を見て、男性がまだ家事に参加していない実態を知り、非常に残念に思ったとのことです。そして、質問を主に作成したのは、4人の男性で、参事官にも見せたとのことですが、それにしても、質問事項の吟味が不足していたようです。

特に、役割分担を問う事項に対しては、実態と考え方を混同されがちなのではと指摘しましたところ、「おっしゃるとおり」との答え。私たちの税金を使って、行なう調査にしては、おそまつですねと話しました。

マスコミに対して、調査発表時に説明をつけたかどうかについては、一応、行なったそうです。男性の記者だけだったので、誤解されてしまったのではということ。それと、この調査がこれから、国の施策に

家族・家庭に関する世論調査から

全国の20才以上の男女三千人を対象として今年三月に面接調査。回収率七三・七%

Q4 SQ3

(結婚している人に)

お宅では、次にあげるような日常的な事柄(11項目)は、主としてどなたの役割で

すか。この中(夫・父親、妻・母親)ではどうでしょうか。

(未婚・離別・死別の人に)

あなたは、一般的に言って、次にあげるような日常的な事柄は、家族のうち主として誰の役割だと思いますか。この中ではどうでしょうか。

使われるかどうかに対しては、具体的にはないとのことでした。

行政で全国的に行なう調査にしては、予備調査をするとか、女性の係官も入れて、無神経な質問をしないなどの配慮をしてほしいと強く感じました。

婦りがけに、広報室の壁に、半裸の女性の等身大のカレンダーがかかっており、即、はずせましたが、まだ、まだ、男女平等に関して、意識が低いことを実感しました。

新聞記事から(傍点編集部)

★男の役割を「生活費を得る」と考える人は八七％。未婚の女性では八二％と、やや低い。「掃除・洗濯」「食事の支度、後片付け」「家計管理」などは、男女いずれも九〇％前後が妻の役割、と考えていた。食事、洗濯などが「男女同じ程度の役割」「男の役割」とみる人は五％もいなかった。――朝日

★女性の回答の方に掃除、洗濯、食事などは「妻の役割」とする回答が多い点で、家事は女の役目、の意識はむしろ女性の方に強いことがわかった。――読売
★「夫が生活費を得、妻が家事をする」という伝統的な夫婦の役割分担を支持する人が九割にのぼった。――日経